

# 第一章 光る源氏の物語 春の町の船樂と季の御読経

[第一段 三月二十日頃の春の町の船樂]

弥生の二十日あまりのころほひ(三月末の晩春の)、春の御前のありさま(六条院春の町の庭先の様子は)、常よりことに尽くして\*匂ふ花の色、鳥の声(例年に無く鮮やかに咲いた花の色合いや賑わう鳥の声があつて)、\*ほかの里には(他の町の御方々に於かれては)、まだ古りぬにやと(御前はまだ春の盛りのまもらしいと)、めづらしう見え聞こゆ(その華やぎを目にしたく思い申します)。 \*「にはほふ」は一説に「丹延ふ(にはふ、赤味が増す)」が語源ともされ、香りではなく色味が艶やかに映える、ことのように。 \*「ほかのさと」は注に<六条院の他の町から見るとこの春の御殿はまだ春の盛りが過ぎないのかと、の意。>とある。であれば、「めづらしう」の「う」は単なる推量では無く、願望・意向の助動詞、かと思う。

山の木立(築山の木々や)、中島のわたり、色まさる苔のけしきなど(池に配した中島周辺を深い緑に覆う苔の様子などを)、若き人びとのはつかに心もとなく思ふべかめるに(若い女房たちが遠景で僅かに見るのではもどかしく思うだろうと)、唐めいたる舟造らせたまひける(殿は唐風の遊覧船を造らせなさっていたものを)、急ぎ装束かせたまひて(急いで舟遊び用に飾り付けさせなさって)、下ろし始めさせたまふ日は(池に初めて浮かべる御披露目式の日には)、\*雅楽寮の人召して(式典の専門樂士を呼んで)、舟の樂せらる(宴を催しなさいます)。親王たち上達部など、あまた参りたまへり。 \*「雅楽寮」は「うたづかさ」と音読みが示され、「うたづかさ」は「うたれう」に同じ、と古語辞典にある。「うたれう」は<治部省に属し、音楽・舞踊などの行事を司る役所>とある。「ふねのがく」は型の定まった歌舞宴会だったらしく、基本的には貴人たちの気ままな管弦の遊びとは違って、決まった演目を専門家が業務として遂行するもの、だったのだろう。

中宮、このころ里におはします(中宮もちょうど里下がりして秋の町にいらっしゃいます)。かの「\*春待つ園は」と励ましきこえたまへりし御返りもこのころやと思し(殿は前に中宮が紫の上に「春待つ園は」と興にお誘いなさったお返事をするのには今が良いとお思いになり)、大臣の君も、いかでこの花の折、御覽ぜさせむと思しのたまへど(上もぜひこの花の季節に中宮に春の町の庭をご覧に入れ申したいと思ひ仰ったが)、 \*「春待つ園は」は注に<「少女」巻に秋好中宮が紫の上に「心から春待つ園はわが宿の紅葉を風のつてにだに見よ」(第七章六段)と贈ったのをさす。>とある。「風の伝手」とは、風に舞い落ちた紅葉を中宮が箱の蓋に乗せて、秋の風情のおすそ分けのように紫の上に贈ったものだった。無論、この贈り物ごっこの本義は見事な秋の庭を造形してくれた殿への感謝の表明であり、それを仰々しく成らないように茶目っ気を出して、中宮が「園の上」に「わが宿」から洒落た戯れ事の形として伝えようとしたわけだ。その際に紫の上は、その箱の蓋に作り物の石と五葉松の枝を乗せて中宮に返して「風に散る 紅葉は軽し 春の色を 岩根の松に かけてこそ見め」(和歌 21-16)と返歌を添えたが、その<軽い紅葉より春の景色は岩に根を張る松に掛けて初子の春を待つまで見る価値がある>という率直な負け惜しみも、茶目っ気には茶目っ気での返しをとという紫君の軽妙な遊び心ならではの即座の機転だった。つまり、この二人が「励む(精を出す)」のは殿への感謝の表し方を競い合うという微笑ましき、と言っても傍目にはその雲上構図自体が相当に嫌味だが、のようだ。で殿は当時、この二人の競い合いについて、六条院落成直後の秋では紫の上に分が悪いので、「春の盛りにこの御応へは聞こえたまへ」と上に勧めていた。となると、やはり今の場面は落成の翌年か。しかし、「このころ」が必ずしも毎年の正月の里帰りを意味しないとすれば、翌年で無い可能性も在るには有る。

\*ついでなくて軽らかにはひわたり、花をももてあそびたまふべきならねば(中宮は式典の段取りも無い宴席に気楽に出向いて花見に興じなさるべき軽々しい立場の御方ではいらっしやらないので)、若き女房たちの、ものめでしぬべきを舟に乗せたまうて(中宮に仕える若い女房たちで花見に興じそうな者を秋の町の池岸から舟にお乗せになって)、南の池の、こなたに通しかよはしなさせたまへるを(南の大池は春の町まで繋げてお造り為さっている)、小さき山を隔ての関に見せたれど(池に突き出した築山が遠目には両町を隔てている境に見えたが)、その山の崎より漕ぎまひて(その山の先から此方の町へ舟を漕ぎ回させて)、東の釣殿に(春の町の東の釣り殿には)、こなたの若き人びと集めさせたまふ(紫の上に仕える若女房たちを集めさせなさって、賑やかな花見を催しなさいます)。 \*「ついでなくて」は中宮が春の町に遊びに来られない理由の説明らしい。だとすれば、この「ついで」は<何かの機会の際に>という意味ではない。今回は親代わりの殿が舟遊びを催すのだから、今こそが<機会>に他ならない。まして、同じ六条院内での宴であれば、むしろ余程の事情がなければ欠席できないとさえ思える。となると、「ついで」とは何を意味するのか。「ついで」は「序」と表記され<順序、序列>というのが原義らしい。だから「ついで」が<何かに付随して>という意味になるのは、本来は何か公式な行事の式次第に予定された項目として、その行事の主題に付随または演出する別の事柄を意味したものを、次第に何かに託けてする事柄一般に洒落て使う言い方に成ったのではないだろうか。つまり、此処の「ついで」は<公式の催事の式次第=式典>を意味するのだろう。また、中宮は皇后である。皇とは王であり、王が臨席する行事は国事行為たる式典である。であれば、王自身の用意としてではなく、列席者の用意として正装が求められる。が、舟遊びは源氏大臣の私的な宴席であり、「親王たち上達部など」は略礼装で気楽に参加しているだろうし、殿の意向としても国体を示すべき式典ではなく寛いだ私的な庭遊びだ。しかし、それでは皇后は出席できないものらしい。親代わりの殿が私服で秋の町を個人的に訪れることは、それこそ殿の六条院の中の事なので問題は無いのだろうが、式典の段取りが無い宴席に中宮が個人的に出向くことは国体を損なうのだろう。今の天皇制とは比較にならない厳然たる身分社会の規範ということだろうか。分かり難いが、そう考える他にはこの「ついで」は落ち着かなさそうだ。

龍頭鷁首(りゅうとうげきす、大蛇と大鳥を船首に飾付ける二艘一対の遊覧船)を、唐のよそひにことごとしうしつらひて(さも中華風の絵柄に造って)、楫取の棹さす童べ(かぢとりのさをさすわらはべ)、皆みづら結ひて、唐土だたせて(もろこしだたせて、中華風に仕立てて)、さる大きな池の中にさし出でたれば、まことの知らぬ国に来たらむ心地して(本当に外国に来たような気がして)、あはれにおもしろく(我を忘れる面白さと)、見ならはぬ女房などは思ふ(そうした風俗に見慣れない女房などは思います)。

中島の入江の岩蔭に(池の中島の入り江の岩陰で見えない所に)さし寄せて見れば(舟を漕ぎ寄せて辺りを見れば)、はかなき石のたたずまひも(ちょっとした石の配置も)、ただ絵に描いたらむやうなり(ただ絵に描いたように端然としていました)。

こなたかなた霞みあひたる梢ども(木立が近くて其処此処に霞のように垂れ込める枝の先が)、錦を引きわたせるに(一帶に花開く景色の中に)、御前の方ははるばると見やられて(殿の御座す正殿が遠くに見遣られて)、色をましたる柳、枝を垂れたる(庭先の柳は枝を垂らして)、花もえもいはぬ匂ひを散らしたり(花は色も見事に咲き誇っていました)。

ほかには盛り過ぎたる桜も、今盛りにほほ笑み(さらには盛りを過ぎた桜もこの庭では今を盛りに咲き誇り)、廊をめぐれる藤の色も(廊下に沿うように張り巡らされた藤棚も)、こまやかに

開けゆきにけり(隙間無く咲き始めていました)。まして(それにも増して)池の水に影を写したる  
\*山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり。 \*「やまぶき」はくバラ科ヤマブキ属(本種のみの一属一種)  
の落葉低木。黄色の花をつける。春の季語。>と Wikipedia に画像と共に説明がある。

水鳥どもの、つがひを離れず遊びつつ(水鳥たちが番のまま水面を移動しては)、細き枝どもを  
食ひて飛びちがふ(巣作りの細い枝を啜えて飛び交うと)、鴛鴦(をし、オシドリ)の波の綾に紋を  
交じへたるなど(が描いた波の軌跡に別の水輪が交じったりして)、ものの絵やうにも描き取らま  
ほしき(何かの絵模様にも書き写したいほどで)、まことに\*斧の柄も朽たいつべう思ひつつ(ま  
ことに時が経つのも忘れる思いで)、日を暮らす(一日を過ごします)。 \*「をのえもくたいつべう(斧  
の柄も朽ちてしまいそう)」の言い回しは、注に<爛柯の故事。>とある。「爛柯(らんか)」はく《晋の時代、王質と  
いう木こりが森の中で童子らの打つ碁を見ているうちに、斧の柯(え)が爛(くさ)ってしまうほどの時がたっていた  
という、「述異記」にみえる故事から》困碁の別称。また、困碁に夢中になって時のたつのを忘れること。転じて、  
遊びに夢中になって時のたつのを忘れること。>と大辞泉にある。

「風吹けば 波の花さへ 色見えて こや名に立てる 山吹の崎」(和歌 24-01)

「風吹けば 波の花さえ 見違える これが名に聞く 山吹の崎」(意訳 24-01)

「春の池や 井手の川瀬に かよふらむ 岸の山吹 そこも匂へり」(和歌 24-02)

「この池は 井手の川瀬に 続くらしい 岸の山吹 同じ花咲」(意訳 24-02)

「亀の上の 山も尋ねじ 舟のうちに 老いせぬ名をば ここに残さむ」(和歌 24-03)

「亀が万年生きるのを 私は此処で見届ける」(意訳 24-03)

「春の日の うららにさして ゆく舟は 棹のしづくも 花ぞ散りける」(和歌 24-04)

「春のうららな舟遊び 棹にきららと光る波」(意訳 24-04)

\*以上の四種は女房たちが庭の景色と宴の趣を愛でて詠んだ歌、とのこと。注にはく起承転結の構成で配列。>とあ  
る。「起承転結」は良く分からないが、これらの歌の列挙は舟遊びの雅な賑わいを表現しようとする演出のような  
ので、詠み手の個性までは考えずに雑観する。一首目の「山吹の崎」と、二首目の「井手の川瀬」は山吹の名所として歌  
枕になっていた地名、と注釈に有る。三首目の「亀の上の山」はく蓬莱山のこと。>とある。「蓬莱(ほうらい)」はく  
中国の神仙思想に説かれる三神山の一。山東半島の東方海上にあり、不老不死の薬を持つ仙人が住む山と考えられ  
ていた。蓬莱山。蓬莱島。よもぎがしま。>と大辞泉にある。

などやうの(などというような)、はかなごとどもを(とりとめのない歌の数々を)、心々に言ひ  
交はしつつ(思い思いに詠み交わしながら)、行く方も帰らむ里も忘れぬべう(何処まで行ったも  
のか帰る里が何処なのかも分からなくなりそうに)、若き人びとの心移すに(若い女房たちが心  
を移すのを)、ことわりなる(十分に映し出すような)水の面になむ(水面をたたえる春の町の池の  
風情でした)。

## [第二段 船樂、夜もすがら催される]

暮れかかるほどに(遊覧が終りとなる日暮れには)、「\*皇じやう」といふ樂(定番の「おうじょう」という曲が)、いとおもしろく聞こゆるに(実に見事に演奏されたが)、心にもあらず(最後まで聞きたいという期待に反して)、釣殿にさし寄せられて下りぬ(早くも上の女房たちが迎える終着地の釣殿に舟は漕ぎ寄せられて中宮の女房たちは下船しました)。\*「皇じやう」の「じやう」は<「鹿」の下に「章」が付く漢字>とのことで、「鹿」は帝位を意味して「逐鹿(ちくろく、帝位を争う)」という言葉も在り、「章」は<まとまった話>だから、この曲は中国の王の武勇伝が元に成っているのかもしれない。が、それはともかく「皇じやう」は旧カナで「わうじやう」新カナで「おうじょう」であり、「往生」とは即ち<おしまい>という意味に洒落言葉で掛かって、パチンコ屋の「蛍の光」よろしく定番の最終曲という趣なのだろう。だから、この文で中宮の女房の視点からの池の風情を称えた話は終わる。そして、その後の御前の花見全体の賑わいの描写へと変わる。

ここのしつらひ(釣殿の飾りつけは)、いとこと削ぎたるさまに(ごく簡素なだけに)、なまめかしきに(和らいでいて)、御方々の若き人どもの(上と中宮それぞれの若女房たちの)、われ劣らじと尽くしたる装束、容貌(見劣りしないよう最善を尽くした衣装や化粧が)、花をこき交ぜたる錦に劣らず見えわたる(花をかき混ぜた極彩色の錦のように見事に見渡せます)。世に目馴れずめづらかなる樂ども仕うまつる(あまり一般に知られていない珍しい曲の数々が舟人の歓迎用に演奏されました)。舞人など(舞い手には)、心ことに選ばせたまひて(若女房たちが喜びそうな美男子を殿が特にお選びでした。然う是うして、)。

夜に入りぬれば、いと飽かぬ心地して(まだ物足りない気がして)、御前の庭に篝火ともして、御階の下の苔の上に(みはしのもとのこけのうへに、正面間近の草むらに)、樂人召して(殿は樂士たちを呼び寄せなさり)、上達部、親王たちも、皆おのおの弾きもの、吹きものとりどりにしたまふ(皆思い思いに琴や笛を合奏なさいます)。

物の師ども、ことにすぐれたる限り(樂士の中で特に上手な者たちが)、\*双調吹きて(宴席を盛り上げる目出度い調子の笛を吹き出すと)、上に待ちとる御琴どもの調べ(縁側の貴族たちがそれを受けて琴を弾き)、いとはなやかにかき立てて(とても賑やかに伴奏して)、「\*安名尊」遊びたまふほど(催馬樂の「ああ尊い」を歌いなさる時には)、「生けるかひあり(生きてて良かった)」と、何の文目も知らぬ賤の男も(なにのあやめもしらぬしづのをも、音楽など何も分からない下男までも)、御門のわたり隙なき馬、車の立処に混じりて(門前に列を為す馬や牛車の駐車場で)、笑みさかえ聞きにけり(嬉しそうに聞いていました)。\*「双調(そうどう、そうちょう)」は「雅樂的音楽研究所」という Web サイトに<現存の調子の中で最も明るい>と説明され、YouTube に少しアップもあったが、その曲調自体に言及できる造詣は私には無いので、この文は<ひととき賑わった演奏場面>として言い換える。\*「安名尊(あなたふと)」は、この三月末の花見の場面と良く似た、二年前の二月末の「少女」巻第七章の朱雀院行幸の船樂の場面でも歌われていた催馬樂で、<ああ何とも目出度い、昔の佳日が偲ばれる>という安泰を祝う歌らしい。

空の色、物の音も、春の調べ、響きは(春の明るい曲の響く賑わいは)、いとことにまさりけるけぢめを(本当に格別に優れているという違いを)、\*人びと思し分くらむかし(秋の町の女房たちも良く分かったことでしょう)。\*「人びと」は<中宮の女房>なのだろう。

夜もすがら遊び明かしたまふ(夜通し時を忘れて花見の音楽会を為さいます)。\*返り声に「喜春楽」立ちそひて(お開きを知らせる「喜春楽」が演奏されて)、兵部卿宮、「\*青柳」折り返しおもしろく歌ひたまふ(催馬楽の「青柳」を締めに見事に歌いなさいます)。主人の大臣も言加へたまふ(あるじのおとどもことくはへたまふ、殿も囃子言葉を掛けなさいます)。 \*「かへりごゑ」は古語辞典に<音楽用語。呂から律へ、律から呂へ調子を転じること。>とある。曲中の転調ではなく、場の段取りに合わせて長調様式の曲目演奏から短調様式の曲目へと変える様な事らしい。ただ、文の運びからして<お開きの合図>という意味を掛けた洒落言葉ではありそうだ。「喜春楽(きしゅんらく)」は春の祝いの席での代表的な舞曲、とのこと。 \*「青柳(あをやぎ)」は注に<催馬楽の曲名。>とあり、歌詞参照に<青柳を 片糸によりて や おけや 鶯のおけや 鶯の 縫ふといふ笠は おけや 梅の花笠や>とある。「や おけや」が<サ、ドシタ>くらいの囃子言葉らしい。「片糸(かたいと)」は撚りを掛けていない糸で、此处では柳の枝をその片糸に見立てている。で、歌筋は<若い柳の下を縫うように飛ぶ鶯が柳の枝を糸にして雨宿りの巣を縫い上げるとしたら春らしい見事な巣になるだろう>くらいだろうか。ところが、この歌をWeb 検索した所、「帯とけの古今和歌集」サイトに古今集 1081 番の「青柳の片糸に縫りて鶯の縫うといふ笠は梅の花笠」のページがヒットした。1081 番は巻 20 の「大歌所御歌」として収められている。「おほうたどころのみうた」は、ざっと文部省唱歌とでも思っておく。同ページの艶な解説も面白いが、私の印象では鶯が男でくたをやぎの(若い女の)かたいとによりて(堅い門に寄って)うぐひすの(ちょっかいを出して)縫ふてふ(差し込むという)嵩は(経験量は)梅の花笠(梅に鶯の相性のように男に相応しい勲章だ)。>とでも悪乗りする。しかし、催馬楽と同じこの歌で何より目に付いたのは「かへしものうた」という詞書だ。背景や経緯は不明だが、取り敢えず「かへしもの」は<返事>と取って置く。そして此处の文では「折り返し」としてある。深い意味は分からないが、この古今集の歌を下敷けば「返り声に折り返し」は<お開きの知らせに依って>という洒落言葉、には成っていそうだ。詰まりは、♫の歌、である。

### [第三段 蛭兵部卿宮、玉鬘を思う]

夜も明けぬ(夜も明けました)。朝ぼらけの鳥のさへづりを(朝の薄明かりの鳥のさえずり、にしては騒々しいこの賑わいを)、中宮はもの隔てて(秋の町の中宮は築山越しに)、ねたう聞こし召しけり(妬ましく御聞きになりました)。

いつも春の光を籠めたまへる\*大殿なれど(このように二条院にいらした時と変わらず春の光を隙なく満たしていらっしゃる源氏大臣の御邸だが)、心をつくるよすがのまたなきを(恋愛対象となる姫君がひとりも居ないのを)、飽かぬことに思す人びともありけるに(物足りなくお思いの客人も以前は居たのだが)、西の対の姫君、\*こともなき御ありさま(昨日の花見の席では、殊の他に優れた御様子で)、大臣の君も、わざと思しあがめきこえたまふ御けしきなど(とても大事に思い申しなさっている御様子などが)、皆世に聞こえ出でて(良く出席者たちに分かって)、思しもしるく(殿が期待なさった通りに)、心なびかしたまふ人多かるべし(姫に心を寄せる人が多いようでした)。 \*「大殿(おほとの)」は注に<『完訳』は「六条院全体をさす」と注す。>とあるが、昨秋に落成した六条院であれば、今は初めて迎えた春であって、「いつも」とは言えない筈だ。大殿は<二条院時代も含めた源氏大臣家>と見るべきだろう。そう読めば私などは寧ろ、この「いつも」という殿の二条院時代からの繋がりを示す言い方から今の場面が六条院に移った初めての春、のような語感を感じて、やはり今は六条院落成の翌年で玉鬘と右近の再会談志が落成直前のことだったらしい、と改めて認識させられる。だからこそその「初音」だったのかと、やっと帖立てが腑に落ちる。逆に言えば、それくらい「少女」巻と「玉鬘」巻の時系列は分かり難い書き方だった。 \*

「ことなし」は「殊成し」と「事無し」が紛らわしい。が、文意からして此処では「殊成し」で、「も」は強調の助詞。また、「ありさま」は<実際に見た>様子、「けしき」は<推量してみた>様子で、此処の文から昨日の花見に對の姫が臨席したことが明示される。尤も、先に「春の御前のありさま」「ほかの里には」「めづらしう見え聞こゆ」とあったので、普通に読めば中宮を除く御方がたは皆が臨席したような気がするが、是が意外と分らない。

わが身さばかりと思ひ上がりたまふ際の人こそ(自分は十分に資格があると自負なざる身分の方は)、\*便りにつけつつ(何度も女房に頼んで恋文に託して)、けしきばみ(歌を詠んで)、言出で聞こえたまふもありけれ(結婚を申し込みなされることも在ったが)、えしもうち出でぬ中の思ひに燃えぬべき若君達などもあるべし(そのようにも言い出せず胸の内に思いを焦がすような若公達なども居たようです)。そのうちに(そうした中に)、ことの心を知らで(実は異母姉弟だという事情も知らずに)、内の大殿の\*中将などは(内大臣の長男の中将などは)、好きぬべかめり(好きになってしまったようです)。\*「たより」は「便り(手紙)」と「頼り(女房に姫への取次ぎ依頼)」の複意、だろう。「つけつつ」も反復動作と複数動作の複意、という洒落言葉。\*「中将」は注に<柏木をさす。内大臣の長男、中将に昇進は初出。>とある。

\*兵部卿宮はた(殿の弟宮の兵部卿宮もまた)、年ごろおはしける北の方も亡せたまひて(長年連れ添いなさった奥様がお亡くなりになって)、この三年ばかり、独り住みにてわびたまへば、うけばりて今はけしきばみたまふ(誰に憚ることも無く今は興味を示しなさいます)。\*「ひゃうぶきやうのみや」は何歳だろうか。36歳の殿と若い時から仲が良いようだから歳は近そうで、42歳くらいかと思われる藤原大臣とも一回り以内ほどと思われる親しさだから、兄宮の朱雀院は殿の三歳上の39歳として、弟宮は殿の三歳下と見て、32~3歳くらいに見て置くか。因みに今上帝は17歳、中宮は27歳、紫の上は28歳くらい。

今朝も、いといたうそら乱れして(また大層酔った振りをして)、藤の花をかざして(藤の花を冠に挿して)、なよび\*さうどきたまへる御さま(品良く陽気に為さっているお姿は)、いとをかし(とても優雅です)。大臣も、思ししさまかなふと(お考えになっていた通りだと)、下には思せど(内心ではお思いだったが)、せめて知らず顔をつくりたまふ(敢えて知らぬ顔を作っていらいっしやいます)。\*「さうどく」は<陽気に騒ぐ、はしゃぐ>と古語辞典にある。

御土器のついでに(お酌が回ってくると)、いみじうもて悩みたまうて(ひどく飲みすぎたようになさって)、

「思ふ心はべらずは(この思いがなかったなら)、まかり逃げはべりなまし(帰ってしまいたいくらいです)。いと堪へがたしや(もう飲めません)」

とすまひたまふ(と兵部卿宮はお酌をお断りなさいます)。

「紫のゆゑに心をしめれば、淵に身投げむ名やは惜しけき」(和歌 24-05)

「薄紫の恋心、染めてみたくて藤の花」(意識 24-05)

\*注にく兵部卿宮の贈歌。「紫のゆゑ」とは縁の意、姪に当たるという意。「藤」と「淵」の掛詞。「紫」と「藤」は縁語。「やは」反語。>とある。旧仮名なら「ふち」と「ふぢ」だが、新カナ使いでは「ふち」と「ふじ」となって趣を邪魔する。晩春ならではの歌、か。

とて、大臣の君に、同じかざしを参りたまふ。いといたうほほ笑みたまひて、

「淵に身を投げつべしやとこの春は、花のあたりを立ち去らで見よ」(和歌 24-06)

「染まるかどうか見たいなら、腰落ち着けて もう一杯」(意訳 24-06)

と切にとどめたまへば、え立ちあかれたまはで、今朝の御遊び、ましていとおもしろし。

#### [第四段 中宮、春の季の御読経主催す]

今日は、中宮の御読経の初めなりけり。 \*注にく中宮の季の御読経のうち、ここは春の御読経の初日、四日間催す。六条院に里下がりして催した。>とある。その「季御読経(きのみどきやう)」は基本的に世の安泰を願う仏会で、その実は大宴会だったらしく、「風俗博物館」Webサイトの「六条院四季の移ろい」トピックの「如月(二月)」ページに説明と解説が詳しいが、Wikipediaに「10世紀頃には宮中行事とは別に上皇や東宮(皇太子)、皇后などの主催でも私的に季御読経が催されるようになった。延長2年(924年)には藤原彰子が主催しているが、これは明らかに中宮の権力誇示を目的としていた。」という記事があり、この文の意味が少し分かった気がした。彰子は紫式部が仕えていた中宮である。秋好中宮に重なる、というか其以外には考えようが無い。これでは丸で、殿が道長では無いか。何とも畏れ入る。どうも、第一段の「ついでなくて軽らかにはひわたり、花をもてあそびたまふべきならねば」は難文だったが、公式の催事としてはこの「御読経」が主行事で、その前祝いとも言うべき花見の会は「ついでなくて(公式の段取りではないので)中宮は軽々しく出席しなかった、ということだったらしいぞ。無教養な私には、嫌味なほどの不親切な語り口だ。

やがて(花見客は引き続いて)まかでたまはで(お帰りをなさらずに)、休み所とりつつ(控え室で休憩しながら)、日の御よそひに替へたまふ人びとも多かり(読経会に出席する為に、昼装束である束帯姿にお召し変え為さる方々も多く居ました)。障りあるは(所用で出席できない方は)、まかでなどもしたまふ(帰宅なども為さいます)。

午の時ばかりに(正午くらいに)、皆\*あなたに参りたまふ(皆、中宮の御殿に向かいなさいます)。大臣の君をはじめたてまつりて(殿を上座に迎え申して)、皆着きわたりたまふ(貴人は皆、着座なさいます)。殿上人なども(高官たちも)、残るなく参る(残らず列席します)。多くは(多くの参列者が)、大臣の御勢ひにもてなされたまひて(殿の御権勢に引き寄せられなさいましたので)、やむごとくなく(非常に高貴で)、いつくしき御ありさまなり(整然とした御法会です)。 \*この移動は、続き廊下を使ったのだろうか。僧侶はどうしたのだろうか。どれくらいの人数だったのか。意外なくらい重要な記述が無く、私には光景が思い浮かばない。漠然と盛大だったのだろうと思うだけだ。

春の上の御心ざしに(春の上からのお供え物として)、仏に花たてまつらせたまふ(仏に生花を捧げさせなさいます)。\*鳥蝶に装束き分けたる童べ八人、容貌などことに整へさせたまひて、鳥

には、銀の花瓶(しろがねのはながめ)に桜をさし、蝶は、金の瓶(こがねのかめ)に山吹を、同じき花の房いかめしう(同じように花の房をいっぱい付けた枝で)、世になき\*匂ひを尽くさせたまへり(世にまたとない彩りを添えさせなさいました)。 \*「とり、てふにしゃうぞきわけたるわらはべはちにん」は、注にく鳥と蝶との装束を付けた童女四人ずつ八人。「鳥」は迦陵頻の舞装束。「蝶」は胡蝶楽の舞装束。 >とある。「迦陵頻(かりょうびん)」はYahoo百科にく雅楽の唐楽曲>とあり、<舞は童舞(どうぶ)四人舞>でく舞人の稚児(ちご)たちは、頭上には紅梅で飾った天冠(てんがん)、背には鳥をまねた極彩色の羽をつけ、両手に銅拍子(どびょうし)を持って打ち鳴らしつつ舞う。同じ童舞である番舞(つがいまい)の『胡蝶(こちょう)』とともにその可憐(かれん)な舞い姿が愛されている。 >と説明されている。その「胡蝶楽(こてふらく)」はく渤海や朝鮮半島が起源なのではなくて高麗楽の様式に則って日本で作られた曲。迦陵頻の番舞(つがいまい)として作られたため、迦陵頻を形式や装束のベースにおいている。 >とWikipediaに参照図を伴って説明されている。幸いにYouTubeに「迦陵頻」舞楽のアップがあり、だいぶ様子が窺える。子供が背中に作り物の羽根を付けて、ざっとスズメとチョウを真似た姿だった、ということらしい。 \*「にほひ」は「丹延ひ」でく香り>ではなく、花と童女の盛る生命力の輝き、だろう。春の芽出立さ、である。

南の\*御前の山際より漕ぎ出でて、御前に出づるほど、風吹きて、瓶の桜すこしうち散りまがふ。いとうららかに晴れて、霞の間より立ち出でたるは、いとあはれになまめきて見ゆ。 \*「おまえ」は秋の町の庭先で、此处は其の視点による描写であり、「やまぎはより漕ぎ出でて」はく築山の先から子供たちを乗せた舟が見えて来た>という臨場感。恐らく船着場は釣殿だろうから、春の町の西側釣殿から秋の町の西側釣殿へ渡したのだろう。釣殿で下船した子供たちは中門で庭へ下りて寝殿正面の階段下に花を運んだ、のだろう。花瓶は台に乗せて四人がかりで運んだか。水は入っていなかったのだろう。とかを想定して見るが、これらの様式が常識で分かっている人にとっては、分かりやすくて見事な描写かも知れない。

わざと\*平張なども移されず、御前に渡れる\*廊を、\*楽屋のさまにして、仮に\*胡床どもを召したり。 \*「平張(ひらばり)」はく棟を設けず、布帛(ふはく)を平らに張って屋根としたもの。また、その形式の仮屋。 >と大辞泉にある。「移されず」とあるのは、前日の花見で設営した船楽の楽人席を取って<移設しなかった>ということだろう。「わざと」は、法会なので基本的には音は僧人の鉦や太鼓か読経そのものであり、それを邪魔する音は憚られる、という意味だろう。ただ今は、童舞の演出なのでこの場面だけには、楽人が「迦陵頻」の管弦を鳴らした。 \*この「らう」は「御前に渡れる」とあるが、東の対から寝殿に掛かる渡殿は恐らく高欄付きの反り橋という透渡殿で、演奏はしにくそうだ。が、短時間の決まった演目ならこなせるか。 \*「がくや」はく控え室>ではなく、文字通り<演奏場所>。 \*「胡床(あぐら)」は楽人などが用いた<腰掛>と古語辞典にある。「召す」は殿が、そういう形で楽人たちに<演奏させなされた>という言い方なのだろう。

童べども、\*御階のもとに寄りて、花どもたてまつる。\*行香の人びと取り次ぎて、闕伽に加へさせたまふ。 \*「みはしのもと」は寝殿正面階段下。 \*「行香(ぎやうがう)」はく焼香すること>ともく法会(ほうえ)のとき、参会の僧たちに焼香の香を配り渡すこと。また、その役目の人。 >とも大辞泉にある。広く見れば、式の管理者たる高僧か、その指示を受けた小僧あたりだろうか。この場面なら、「取り次ぐ」はく用件を伝える>や<仲を取り持つ>ではなく、実際に花を<次>に取って運んだ>のだ。「闕伽(あか)」は供養の水だから、これらの花は仏前に捧げられた訳だが、施主は中宮だから、中宮が係りの僧に飾らせなされた、と読んで置く。こうした春の上の御目出度い演出のルポは、私でも懂れるほどだから、当時の一寸した勢力の御邸だったら、どうしてもその真似事くらいはしたく成ったに違いない、と思えるほどの相当な見せ場である。法会の説法の有難さは分からなくても、この整然とした儀式という舞台に可愛くて美しい華やぎをみせることは、それ自体が極楽の有難さを表現して



いるのかも知れず、百万遍の読経に勝る、のかも知れない。何れにせよ、公式の場へ出席する立場ではない紫君にとって、この貴人高官が居並ぶ席での面目は如何にも絶頂であり、この人の存在意義が生前に既に示されてしまった怖ささえ感じさせる。しかし怖いと言っても、面白い事をする罪深さは、面白い事を求める生命体自体の罪深さであり、宇宙論で見れば多様性を求めるその物性自体は研究対象には成り得ても、その逐一の変化の全体論における意味は対象項目にすらならない些末な事柄である。つまり、限界は自分が見做さない限り外形的に決めることに意味は無いのであり、であれば、その怖さは悲しいのではなく楽しいと思わなければ、ヒトは生きている甲斐がない。と、此処まで引いて考える生命体を、ヒトは霊長類と分類するのだろうか。もう、度壺である。

#### [第五段 紫の上と中宮和歌を贈答]

御消息(上からのお手紙は)、殿の中將の君して聞こえたまへり(殿の中將が取り次いで中宮に差し上げました)。\*この文は古文としては、言い換えが不要なほど分かり易い。が、内容は簡単には読み下せない。中將の君は使い走りをする立場では無い。御曹司である。それに、母親代わりは花散里であり、紫の上とは然程親しくは無く、わざわざ上が頼むというのも考えにくい。で、恐らくは斯うである。中宮と紫の上との秋と春の優劣遊びは、秋の町と春の町の挑み合いに成っていて、其は即ち、中宮に対して紫の上と殿の連合体が抗しているのであり、要するに是は殿が息子に運ばせた、のだろう。態と仰々しい言い回しをする軽口めいた語り口が、男社会の公の場までが身内感覚という大殿の権勢、を絶妙に表現する。

「花園の胡蝶をさへや下草に、秋待つ虫はうとく見るらむ」(和歌 24-07)

「いくらお誘いしてみても、春は秋ると嫌われる」(意識 24-07)

\*注に<紫の上の贈歌。昨秋、中宮から「心から春まつ園はわが宿の紅葉を風のつてにだに見よ」(「少女」巻第七章六段)と贈られた歌への返歌。中宮の「待つ」「見よ」の語句を受けて「まつ」に「待つ」と「松虫」の「松」を掛け、「け疎く見るらむ」と返す。>とある。中宮は紅葉の葉を箱の蓋に乗せて童女に運ばせて紫の上に贈っての歌であり、今は胡蝶舞の童女に花盛りの枝を運ばせて上が中宮に贈っての歌である。「こてふ」は「チョウ」でもあり、「来てふ(来いと言う、来れば良いのに)」という<招待状>でもある。「心から春まつ園」は今は「花園の胡蝶(春の町への招待状)」を出す季節になっている。「したくさ」は「秋待つ虫→秋の松虫」への導入でもあるが、それ自体で<内心>を意味する。「マツムシ」はチョウに対する昆虫だが、飽くまでも秋を<待つ腹の虫→不満な本心>でもある。遊びだから言葉遊びはするが、底は浅い。だからこそその遊びであり、根本は殿の権勢を称えるものなのであり、また遊びとは所詮そうしたものかも知れない。

宮、「かの紅葉の御返りなりけり」と、ほほ笑みて御覧ず。

昨日の女房たちも(昨日船樂で遊んだ宮付きの若女房たちも)、「げに(確かに)、春の色は(春の華やぎは)、え落とさせたまふまじかりけり(とても眨め為さる訳には行かないようでした)」と、花に\*おれつつ聞こえあへり(花に見とれて申し上げ合っていました)。\*「おる」は「愚る」と表記され<愚かになる。心を奪われる。>と大辞泉にある。

鶯のうらかなる音に(うぐひすがのどかに鳴く声に)、「鳥の楽」はなやかに聞きわたされて(舞曲の「迦陵頻」が華やかに響き渡って)、池の水鳥もそこはかとなくさへづりわたるに(池の鴨

も其処此処と轉る中に)、「\*急」になり果つるほど(曲が終盤に盛り上がって終わってしまうのが)、飽かずおもしろし(惜しまれるほど可愛らしい)。 \*「きふ」とは、注に<舞樂の構成、序・破・急の終わり章になる。>とある。

「蝶」は(胡蝶樂では子供たちが)、ましてはかなきさまに飛び立ちて(いっそうひらひらと飛び舞って)、山吹の\*籬のもとに(山吹の小さな垣根に)、咲きこぼれたる花の蔭に舞ひ出づる(咲き溢れる花蔭に入って、見失うかと気が揉める)。 \*「籬」は「まがき」ではなく「ませ」と読むようで、<丈の低い目の粗い垣根>と古語辞典にある。

\*宮の亮をはじめ(中宮職次官をはじめ)、さるべき上人ども(宮に近い殿上役人たちが)、禄取り続きて(品々を手渡すようにして)、童べに(わらはべに、中宮は子供たちに)賜ぶ(たぶ、褒美をお与えになります)。鳥には桜の細長、蝶には山吹襲賜はる。\*かねてしも取りあへたるやうなり(子供たちが持参した花と同じ色の飾り着が褒美とは、まるで前もって打ち合わせて在ったかのような符合でした)。 \*「みやのすけ」は注に<中宮職の次官。系図不詳の官人。>とある。「さるべき」とは、その人物と同様に<宮に近付きのある>。「うへびと」は<殿上人>。 \*「かねてしも」は注に<桜襲と山吹襲の細長の装束が、それぞれ桜と山吹の花を奉ったのとぴったり一致したので。>とある。確かに逆の取り合わせだと話が美しく無いのかも知れないが、春の定番の色取りを幾つか用意した中から後付で与えたのだろうものを、御目出度い言い回しで表現した、という所なのだろう。

物の師どもは(楽人たちには)、\*白き一襲(白い下着類や)、腰差など(反物などを)、次ぎ次ぎに賜ふ(身分に応じて順々に与え為さる)。 \*「しろきひとかさね」は良く分からない。取り敢えず<白い重ね着用の衣服>と言い換える。「こしざし」は「脇差小刀」ではなく、<かずけ物として賜わる絹を丸く巻いた物。もらった時に腰に差して退出するのでいう。>と古語辞典にある。取り敢えず<反物>と言い換える。

中将の君には、藤の細長添へて、\*女の装束かづけたまふ。 \*「をんなのしょうぞく」には特に注も無い。私には特異に見えるが、疑問は無いのか。紫の上の名代だからだとしても、褒美は使者に労をねぎらって与えるべきもの、なのではないのか。禄の認識が違うのだろうか。仮に、用意した桜と山吹と藤の細長の内、残った藤を与えることが符合のオチになっている、という話が成立するなら、その解説が欲しい。それに、中将の君にだけ「かづけたまふ」としてあるが、「かづく」は<禄として衣服を頂く。また、それを肩にかける。>と古語辞典にあるが、もし、女の飾り着を中将の君の肩に掛けた、それももし、中宮が自ら掛けたとしたら、その意味するところは必ずや含みがあるに違いない。此処に中将の君が登場する基本的な意味は、一体何なのか。しかし、一切の説明は無く、力の無い私は調べる手立ても立たないまま、落ち着かない気分で先を読み進むのである。

御返り、

「昨日は\*音に泣きぬべくこそは(昨日は其方のような賑やかな音が此方にはない寂しさに声を上げて泣きそうなほどでした)。 \*「音に泣く(ねになく)」は<声を上げて泣く>とあるが、これが「音に無く(静かだ)」との洒落言葉でなければ、この縁起立ての法会の場に冗談にすら成り得ない不相応な言い方だ。ということは、実は言い換えが成立しない言い方でもある。謂わば、言い換えは意味の外に意味があることの証明だ。

胡蝶にも誘はれなまし心ありて、八重山吹を隔てざりせば」(和歌 24-08)

## 重々その気でいたけれど、八重は九重に届かない」(意識 24-08)

\*注に<秋好中宮の返歌。紫の上の「胡蝶」を受けて、「胡蝶」に「来てふ(来いといふ)」「やへ」に「八重」と「八重山吹」を掛けて「誘はれなまし」と返す。しかし、「まし」は反実仮想の助動詞。「隔てざりせば」という「隔て」が存在するので、行けませんの意。>とある。歌筋は、場の有様を詠み込めば<花見の招待状を待っていたけれど此処は遠すぎたのか、使いの蝶が昨日は間に合わずに今日遣って来ました>くらいになるのだろうか。「やへ」の「や」は<それ>で「へ」は<さえ>の語感か。「八重」は事物が多く重なって<非常に多い・遠い>であり、「八重山吹」は「山吹」の花弁が多い品種。掛詞も多重。私には、季御読経が本来は宮中行事だったことから<宮中=九重>を意識した歌詠みに見えるが、それが特別な主旨とまでは思わない。何れ、遊び言葉の言葉遊びだ。

とぞありける。

すぐれたる\*御労どもに(優れた歌詠みの御兩人に)、かやうのことは堪へぬにやありけむ(こうした春秋優劣論争は何時までも続ける御遊びでは無いようです)、\*思ふやうにこそ見えぬ御口つきどもなめれ(底の浅い言葉遊びは和歌の練習なので、本当に思いを詠み上げる歌ではないのですから)。 \*「御労ども(ごらうども)」は見聞き馴れない言葉だ。「労」は<骨折り、功労>だが、また長年の<業績や熟達>でもあり<功労者、熟練者>でもあるようだ。「御」とあるので中宮と紫の上のことであり、つまりはこの春秋優劣論争のこと、なのだろう。 \*「思ふやうにこそ見えぬ」は「めり」の分析説明なので、<思いを歌う和歌本来のものではない>という理屈にも見えるが、遊ぶ気分も本当の気持ちではあるので、要するに<もう二人がこの遊びに飽きた>ということ品良く言っているワケだ。どうやら、作者による幕引きの弁らしい。

まことや(それにまた)、かの見物の女房たち(昨日の花見の女房たちの内)、宮のには(宮付きの者どもには)、皆けしきある贈り物どもせさせたまうけり(今日の中宮からの禄に先立って、上は皆に見事な贈り物を与え為さっていたのです)。さやうのこと(それらの)、くはしければむつかし(詳しい話は今さらもう良いでしょう)。

明け暮れにつけても(平素からこの御方たちは)、かやうのはかなき御遊びしげく(こうした心ばかりの御遊び事が多くて)、\*心をやりて過ぐしたまへば(面白くお過ごしだったので)、さぶらふ人も(仕える女房たちも)、おのづからもの思ひなき心地してなむ(自ずと屈託無く行き来して)、\*こなたかなたにも聞こえ交はしたまふ(春の上と中宮は親しくお手紙を取り交わし合い為さいます)。 \*「こころをやる」は<気を晴らす、得意になる>とある。上機嫌で面白がる、と取る。 \*「こなたかなた」は、注に<語り手にとって、心理的に近いほうが「こなた」、遠いほうが「かなた」。「こなた」は紫の上、「かなた」は秋好中宮。>とある。「こなた」が<春の上>なのは、「心理的」と言うよりは殿の主殿が春の町だという事に依る気がするが、確かに語り手の視点でもあるだろう。